



KARIBIB の回想



2023 年度 1 次隊/数学教育/渡辺 崇人

2025 年 9 月 5 日 Vol. 37

本日は、これまでの 2 年間の活動について振り返ります。

1. 数学

① 要請のあった背景

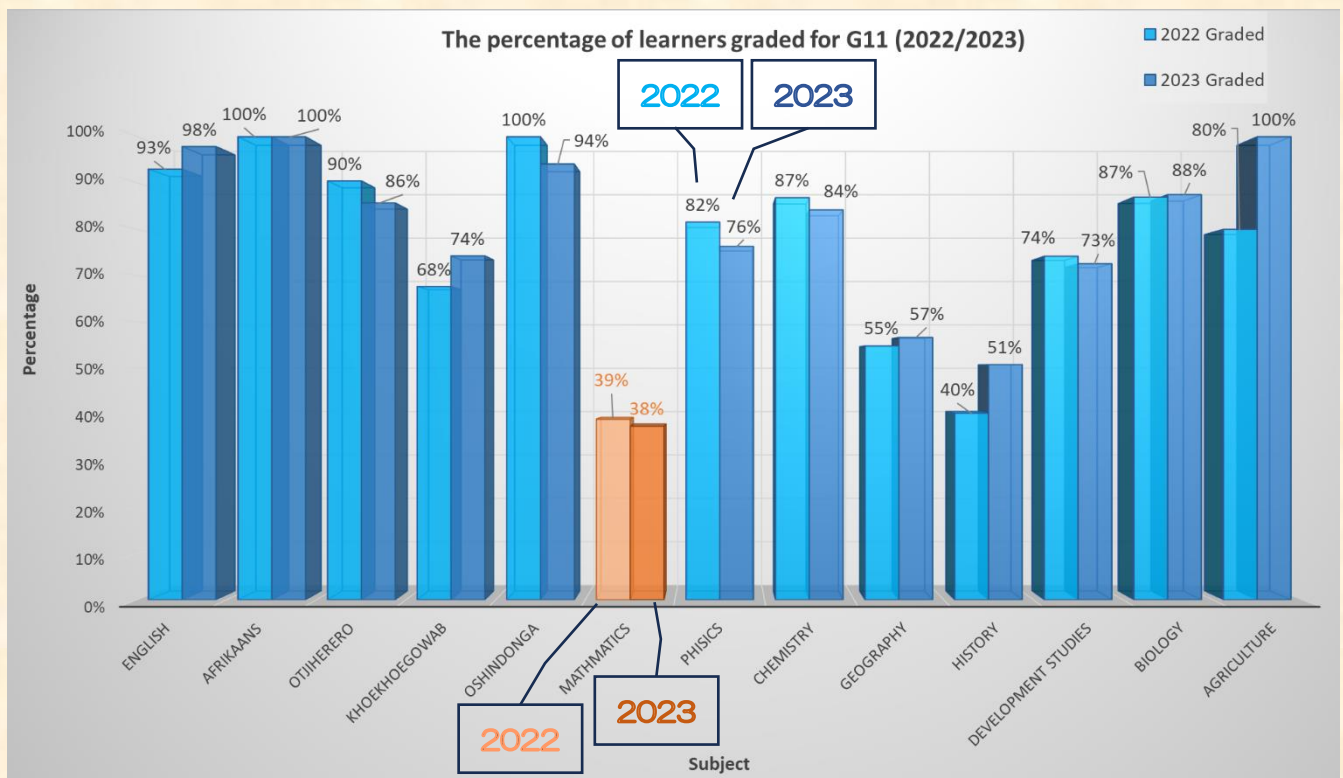


図 1：2022 年（左）と 2023 年（右）の最高学年の各教科の単位修得率（オレンジが数学）

図 1 は横軸が教科名、縦軸が最高学年の単位修得率を表したグラフ（各教科の左の縦棒が 2022 年、右の縦棒が 2023 年の結果）で、中央付近のオレンジが数学を表しています。

この図からも一目瞭然ですが、弊配属先では特に数学の単位修得率が芳しくなく、例年 50%を切っているということが課題として挙がっていました。そこで、この単位修得率の底上げのために JICA へボランティアの派遣要請があったという背景があります。

② 取り組んだこと

これを踏まえた上で、自身は定量的な活動目標として、レギュラークラスの年末の数学の単位修得率を 50%以上とすることとしました。また、伸び悩みの原因を探ったところ、[Vol.7](#)で挙げた課題のほか、英語で書かれている文章を理解できていないといった英文読解にも課題があることが分かりました。

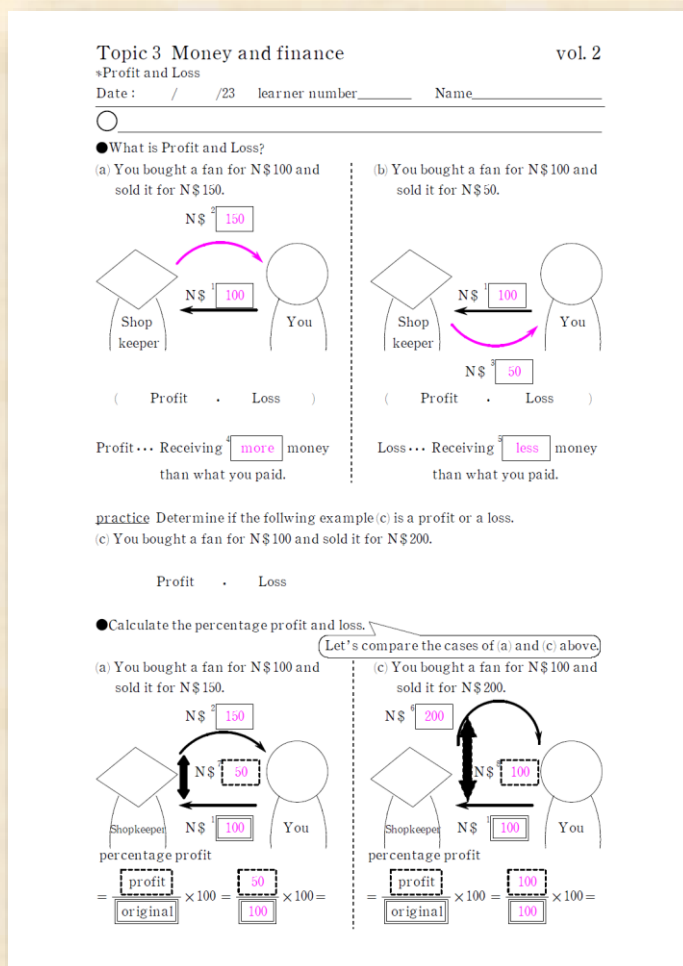


写真2：ある日の授業の様子

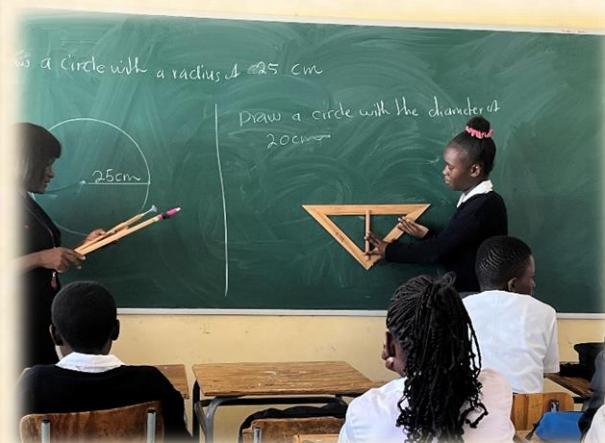


写真3：他の先生の授業の様子

そのため、写真1：授業で使った教材の一例

- 進級するにつれて抽象的になる内容を可能な限り簡素化し、日常の事例に落とし込んだり、絵や図を使ってロールプレイングをして説明したりした（写真1，2）。
- 生徒に教師役をやらせた（これが効果てきめんで、他の生徒が最も集中していました）。
- 放課後や土曜日に補習を行った。たまにゲームや雑談も行った。
- 他の先生の授業にサポートとして入り、採点の手伝いをしたり、日本から寄付いただいたコンパス・定規の使い方を一緒に練習したりした（写真3）。

等々、これら以外にも思い付いたことは色々と試してみました。

③ 結果



図2：数学の単位修得状況

図2が2023年（左）と2024年（右）のレギュークラスの単位修得状況を表したものです。メンバーにはやや入れ替わりがあったものの、一年を通してほぼ同じ生徒の成績を追うことができました。

グラフ中のアルファベットは評定で、Aに近いほど好成績を表します（詳細は、[Vol.14](#) 参照）。そして、各グラフの一番底にあるUが“単位不認定”を表し、左図の通り2023年から2024年にかけて約9%も上がってしまいました。

細かい原因を挙げればいくつもありますが、自身のやり方が完全には生徒にハマっていなかったことも大きな理由の一つでしょう。

また、図3は提出物等の点数を一切加味していない、試験のみのスコアの分布を表したものです。図の細かい説明には専門的な知識が必要になるため割愛しますが、各グラフの中央にある箱全体が上がれば、得点分布も全体的に上がったと見なせます。

ここも残念なことに、2024 年後期では箱が少し下がっています。試験自体の難易度もあるため、この結果が学力が伸びていないということに即繋がる訳ではありませんが、自身の取り組みが不十分だったことは事実として受け止めなければなりません。

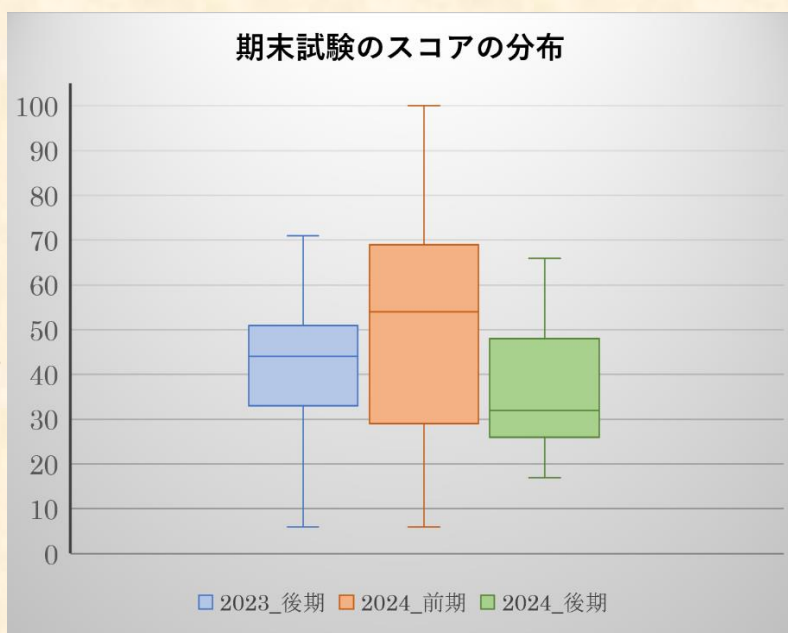


図3：期末試験のスコアの分布

このように、成績や試験のスコアでは目立った成果をあまり出せず、当初の目標も達成できませんでした。自身のやり方を精査しなければならないと深く反省します。ただ、1つだけ生徒の中で変化が見えたものが“数学”に対する意識です。着任当初と最後の授業でとったアンケートの「数学が好きか?」、「数学が得意だと思うか?」という設問への回答を比較すると、

● 数学が好き 》》》 10%増 , ● 数学が得意だと思う 》》》 21%増

といった結果が得られました。このようにいい方向に意識が変わったことは、日本だろうがどこだろうが数学教員としては何よりの喜びです。最終結果を意識しつつ、この割合も増やしていけるような取り組みを考えていかなければと思いました。

2. その他総括

詳細はナミビア通信の他号の通りですが、数学以外でも IC の授業や日本語クラス、イベント、雑務（書類作成、会計、Excel の指南）等色々とやりました。紙面上ではすべて順調だったように見えますが、その裏には書ききれない何十倍もの死屍累々な試みがありました。想定より一つひとつに時間を割かなければならず、何度も計画が白紙に戻る等苦労が絶えませんでした。それでも声を大にして言えることはボランティアとしてアフリカにいられてよかったということです。確かに、これまでに紹介したような旅行は楽しいです。ただ、こうやって試行錯誤したことが微力ながらも誰かの幸せに繋がるという経験にはどうしても勝りません。と同時にサポート役として来ているもののナミビア人から学ぶことも多々ありました。暮らしの便利さや物の豊かさは日本の方が上でしょう。しかし日々をゆったりと楽しむ心の豊かさに関しては、ここで学んだことが多く、その対比が私に常に人生の本質を問いかけていました。「幸せを追い求めて生きているはずなのに、気付けば苦しくなっている。」彼らの生きる上での考え方は、そんなジレンマを打破してくれる大きなヒントになりました。

次回：とうとう勤務最終日がやって来ました。当日の様子について紹介します。